

夢ゆめ主ぬし

小笠原 泰子

夢が全て、夢あればこそその人生。

私は夢違ゆめがたい観音様に守られた夢主だった。司会業に就いて五十年にもなる。それは夢を持つことは、本当に大切なことなのだと思います。続けてきた年月でもある。

小学三年生の時に、黒柳徹子に憧れてアナウンサーになりたいと思った。当時、彼女のことをアナウンサーだと勘違いしていた。六年になって、学芸会や運動会の司会を務めたり、後々に弁論大会で優勝したりすると、マイクを通した声の響きの心地良さから、アナウンサーへの夢がより確かなものに膨らんで行き、高校生になると第一志望の職業となった。

アナウンサー志望の最低条件が大卒だった。

大学への進学は当たり前前と違っていた環境にあったので、受験勉強の追い込みに大事な十二月になって、父が末期癌の為に闘病わずか四十日間で他界し、あっけなくその夢が断たれようとは思ひもなかった。母が言ったのだ。「経済的に大変なので進学は諦めてほしい。和裁の免許があるから、何とか生活はできそう。」と――。



小さい頃から、私の洋服やセーターはほとんど母の手作りだった。〈主婦の友〉という月刊誌をとって、人気子役の松島トモ子が着ていた服をよくリクエストした。それは私が結婚するまで続き、嫁入りの着物もみな母の手製だった。母の裁縫の技術はすごかったみたい。優しくて労を惜しまない母を尊敬していたし、大好きだったので母の言うことは素直にきけた。反発などはない。

冬休みに入り、就職活動を何もして来なかった私は、とに角、働き場所を探さなくてはと焦った。第二志望は保育士だった。昔、通っていた私立保育園の園長先生とは、卒園後も暫く交流が続いていて、会う毎に「大きくなら、うちの保育園で働いてね。」と言われていたので、半ば洗脳気味に保育士という職業は、いつも夢番付の上位についていた。

(絶対に雇って貰える、大丈夫)と確信し、園長先生に手紙を書いた。すぐに返事を落手するも、中味は大丈夫ではなかった。『国家試験という手立てはあるが、格が違ってくる。貴方には進学して専門の教育を積み、資格を取得してきてほしい』と。これで第二志望も敢えなく消え去った。(どうしよう)、その時頭に閃いたのが、ある有名書店の常務さんの話だった。彼は、十一才年上の長兄の高校時代の勉強仲間であり、東大を卒業後に実家の書店で常務となり、出世頭だというのを長兄から聞いたことがあったのを思い出したのだ。成績表と共に手紙を駄目もとで送ってみた。すぐに返事が届いた。駄目もとではなく、『あの彼の妹さんなら大歓迎です。採用します。卒業休みになったらいつでも来て下さい』の内容だったのである。

斯くして私は、学校の世話にもならず、長兄のお陰で就職先を見つけることができた。長兄を驚かすことになったが、母を安心させることができた。パーマをかけて大人の仲間入りをした私は、二月二十日、薄化粧をし、学生服をリフォームした母手製のツーピースを着て社会人の第一歩を踏み出した。一週間が途轍も無く長かった。働くことは想像以上に大変で、泣いてばかりの夜を過ごしていた。

そんな折、四才年上の次兄が下宿先から帰って来た。兄もこの春に大学を卒業し、四月から名古屋で働くことになっていた。「おい、まだ受験が残っている学校があったぞ。二年間だし、県立だからお金もかからない。

保育士の資格が取れるみたいだ。」願書の書類を机に広げながら一気に捲し立て、母をも説得してくれた。彼は、私だけが進学できないことを不憫がり、相談もなく就職を決めたことを怒っていた。次兄のお陰で進学の夢が叶った。園長先生はこの報告を受けてとても喜んで下さった。(次は常務さんだ、ひたすらお詫びするしかないと覚悟を決めた) 昼休みに合格通知を持ってお詫びに伺った。「そう、おめでとう。僕は進学は大賛成だよ。勉強できる時には大いに勉強してほしい。頑張っ」と話して下さり、私の我がまま無礼に対しては一言の咎め立てがなかった。何と素晴らしい常務さん、このような人になりたいと強く思ったものである。帰りがけに十日分のお給料と合格祝いまで持たせて下さった。このお陰で入学準備が整った。

二年間の学校生活は、生涯の友と成り得た友人に出会え、サポータージュなるものも覚え、恋愛もして青春の名を欲しいままにした充実の日々だった。卒業近く、就活まっ只中の頃、私は卒業生中の一番で就職先が決まった。

あの園長先生が、九十才近い体を押して自ら学校に向き、私を採用したいと申し出て下さったのである。「公務員並の給料、近い将来は主任としての待遇……」を条件に学校と掛け合い、私の獲得はすんなりと決まった。

園長先生は、こんな私を必要として下さり、子供の頃の約束を守って採用して下さいました。

嘘や迷いがなく本当に人道的、何て素晴らしい園長先生なのだろう。このような人にならなくてはと強く思ったものである。(先生は九十才の時に天皇陛下から直に勲章を受けられた)

奨学金のお陰もあって無事に卒業できた私は、保育士として今度こそ本当の社会人デビューを果たした。保育園の仕事はやり甲斐があった。園児達に成長の喜びや元気を貰え、四季折々の行事を共に楽しむ経験から、日本人の忘れかけていた誇りを思い出させて貰ったりと、とに角、働くことが嬉しく有り難かった。ウンチおもらしの始末も茶飯事のことであり、初めての難行も多々あったけど、少しも苦にならず泣くことは無かった。今、話題になっている『子供の声は騒音?』との見方も、当時は近所の方々からも全く耳に入らず、恵まれた時代だったかと感謝する。

結婚したての頃に、かねてからの主任の話が持ち上がった。がお断りし、妊娠を理由に育児退職をさせて頂



いた。『三才までは正規に働かずに子育てに集中したい』との私の揺るがぬ育児論の夢は、園長先生にも最初から理解して頂いていたので円満に退職できた。

この頃から、子育て中の母親対象の講演会の司会を頼まれ始めた。保育士であったことや発声の良いことが選ばれた理由らしい。千五百人のお客様の前に「水を得た魚」とは正に私のことばかりに元気な私が舞台上にいた。

その舞台を見て下さった方々から次々と声を掛けて頂け、成人式・周年式・落成式・コンサート・ダンス大会・スポーツ大会・長野パラリンピック聖火式・ファッションショー・港祭り・決起大会・イベント等と色々な司会をさせて頂いてきた。(これって、私の描いていた夢の仕事ではないかー!)

この時、夢を諦めてさえないなければ、夢は向こうからやって来てくれることもあるし、夢の代わりにかけがえのない人物を遣わせて、私を助けてくれることがあるのではないかと考えついた。又、神仏様がこっそりと発声や調音の練習をしているのを見て下さって、『そろそろ夢を叶えてあげようか』と努力を認めて下さったのかも知れないと、妙の働きも感じたりし、勝手な想像が渦巻いていた。

やがて、末の子が保育園に入り、再就職の機会が訪れた時、奇跡が起こった。某結婚式場の「アナウンサー募集・学歴不問」の小さな新聞広告が目に入ったのだ。飛びついたのは無論のことで、その広告記事の発見は、奇跡の確率と言える運命の瞬間だった。試験の難関を乗り越え、晴れて、アナウンサーと呼ばれる身となれた。母には、日曜日毎に、夫や子供達が食事の世話になってしまう。母は「アナウンサーになれて良かったね。」と笑って応援し続けてくれた。披露宴の司会は、一日に三組を受け持つことも多く、ハイヒールを履いての九時間の立ち仕事は、かなりの重労働で体にこたえる。好きでなければ大変かと思う。私には合っていたようで、いやな思いをしたり、泣いたりすることは一度もなかった。笑顔と誠実さがスキルよりも受け入れられた世界だったのだと思う。更年期障害が出始めた頃、千回を越す披露宴組数が達成したのを良しとして退職し、フリーへと転向した。仕事は途切れることがなかった。

夢があったからこそ、目標となる素晴らしい人に出会え、多くの恩を頂け、努力した今の私があると思う。後期高令者になったけど、まだまだ、人に語れる夢や、話せる程でもない夢がいくつもある。私はこの先もずっと夢主のまま、頂ける人生を喜ばし歩いて行く。